

## 平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

|     |           |      |       |          |       |
|-----|-----------|------|-------|----------|-------|
| 学校名 | 福山市立誠之中学校 | 校長氏名 | 海野 隆博 | 生徒指導主事氏名 | 友野 禎之 |
|-----|-----------|------|-------|----------|-------|

## 取組事例名 『体育大会 縦割りチームでの取組み』

## 取組のねらい『過程を大切にする自治集団の育成』

- ・望ましい集団活動を通して、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。
- ・生徒（学級・学年・生徒会・部活動）の自主的、創造的な活動を育てる。
- ・縦割り集団や学級での活動を通して、集団の団結を深め、過程を大切にする自治的集団を育てる。



## 取組の具体的内容『創る』

- ・縦割りの6チーム（赤・青・黄・緑・紫・オレンジ）の色別対抗とする。この縦割りは文化祭における全校合唱指導でも同じチームとなる。
- ・各チームに3年生からリーダー、副リーダーを置き、リーダーを中心に発表の内容や練習計画、実施中の指導やチーム課題の改善を行う。リーダーは、体育大会と文化祭の両方を兼ねても良い。また1年生、2年生から応援団としてクラス5～7人を選出し、1～3年生の応援団として指導をすすめる。
- ・中学生としての力強さ、素直さ、一生懸命さ、真剣さをアピールするもの考える。
- ・集団の美、力強さをアピールするものを考えていく。
- ・集団で練習し、上達できるものとする。
- ・誠之中学校に誇りの持てる応援合戦を行う。  
（オリジナルの応援歌・応援型・リズムダンス等）
- ・『学級旗』を各クラスで作成する（学級委員会より提案）。  
そのために、学級でデザインを考える。デザインが決定したら、体育大会の準備期間に学級旗担当生徒が練習と同時並行で取り組む。1年間、他の行事にも使用するため体育大会が終わったら、クラスへ掲示し、文化祭ではメイン会場である体育館へ全クラスの旗を掲示する。
- ・練習計画の概要は担当教員が準備するが、チームごとの細かい練習計画はリーダーを中心に各チームで計画させる。
- ・毎練習後、リーダー会を行い、本日の評価と課題の交流を行う。  
その場を体育大会での規律徹底の基準になるよう指導する。
- ・各チーム（縦割りクラス）の担任や副担任は、自分のクラスを中心にしっかりと指導し、学年を越えての指導も行う。



## 取組の課題・創意工夫『 楽しみ、競う 』

- ・リーダーと応援団になる生徒は、クラスにおいても比較的中心になっているメンバーが多く、その流れについていけない生徒が出てきやすく、練習に参加したくない、練習のある日は欠席するなど、ネガティブな行動をとる生徒が毎年見られる。
- ・体育大会が5月の上旬ということもあり、一時的にモチベーションを上げて参加する生徒が少なくなく、「リーダーとしての意識」を継続させるための、継続的な取組が不十分であることが課題と思われる。
- ・反対に「リーダーになり、体育大会に関わりたい」という気持ちは1～2年生のころから芽生えており、成長過程における重要なモチベーションとなっている。
- ・リーダー会の中で、他チームの良い取組や課題を、全体にシェアすることで、工夫と改善を繰り返し成長する姿がみられる。
- ・本年度のスタイルになり3年が経過したが、他チームを非難するような言動は見られず、場面によっては、相互に応援したり、声を掛け合ったりする姿が見られる。



## 取組の成果（効果）『 生かす 』

体育大会の取組をとおして、1、2年生が「3年生のようにになりたい!」「3年生に感謝」「来年も応援団に入る」など取組に対して肯定的な意見が多く、3年生もそれらの評価を聞いて、自己肯定感の高まりを感じることができる。（その後の学校行事、学校生活全般、部活動等）



## 今 後 の 展 開『 超える 』

より生徒の自主性を尊重した取組にしていくために、全ての学校生活に根ざした学校行事になるよう、リーダーシップや自己肯定感、有用感が育つ活動にしておく必要がある。同時に、最終的に成功体験となるように指導をすすめて行く。そのために厳しい指導、規律を守った生活、他者尊重の精神を日常的に指導していく。



## 他校へのアドバイス『 指導し、評価する 』

担当任せの取組になってしまう内容であるが、生徒指導面でのウェイトは高く、短期間に生徒の成長が大きく期待できる場面でもある。よって、職員全体で同じ基準で指導し、課題解決は迅速対応、成果に対してはしっかりと誉め評価することが大切である。